

## OECD HPV 初期評価特集

化学生物総合管理学会は、「化学物質及び生物の総合管理に関する学術と教育の発展を図り、もって産業と社会の健全な進歩および生活と文化の向上に寄与すること」を目的としている。そして「化学物質及び生物のリスクの評価と管理に係る科学、技術、企業行動、社会制度などについての知見の集大成、体系化」および「化学物質及び生物のリスクの評価と管理に係る知見と技術の教育・普及・啓発」等をその事業に掲げている。そこで、この学会誌においては、いわゆる「研究論文」だけではなく、「化学物質及び生物のリスクの評価と管理」のために多くの情報を整理・体系化した文書を論文として位置づけ、「総合報文」として収載することにより、「化学物質及び生物のリスクの評価と管理」に従事する個人および団体の努力を広く紹介し、これに係る知見と技術の教育・普及・啓発を促進することを目指している。

この創刊号においては、1987年3月にOECD (Organisation of Economic Cooperation and Development: 経済開発協力機構) の第3回ハイレベル会合において合意された、既存化学物質の人の健康および環境に対する影響を評価するためのHPV (High Production Volume chemicals) プロジェクトに対する日本企業の貢献を取り上げた。今後も、OECDのHPVに関する活動を総合報文特集として継続的に紹介することとする。

初期のHPVプロジェクトでは、必要な作業は加盟各国の政府が実施することとしており、日本国政府は厚生労働省(当時、厚生省、労働省)、経済産業省および環境省がそれぞれ分担して日本担当物質のSIAR (SIDS Assessment Report) を作成してきた。その後、1998年秋に国際化学工業協会協議会 (ICCA: International Council of Chemical Association) がICCA Initiativeとして、自主的にこのプロジェクトの加速化に協力することとし、2004年末までに1,000物質のSIARを提出することを表明し、日本企業を含め化学工業界がSIARを作成することとなった。現時点ではSIARの品質を維持するために、作成企業の所属する政府によるレビューを受けるとともに、インターネットを用いた事前協議 (CDG: Committee Discussion Group) においてOECD事務局および各国からのコメントにより修正を行った後、SIAMに提出して承認を受けるとしている。このような状況の中で、日本の化学工業界が、欧米の化学工業界と歩調を合わせて自主的にOECDの既存化学物質プログラムに参画することは大きな変革といえるであろう。

今回は、CDGにおいてOECD事務局から“Overall, this assessment is of high quality”との評価を受けたSIARについて、その作成の経緯をふくめて報文として収載し、化学物質のハザード評価に対する積極的な取り組み例を紹介する。

次回以降も、各種SIAR及びその作成のための経緯を掲載し、個人および団体の努力を広く紹介したい。化学物質のリスクの評価や管理に関心を有する方々のご意見とご批判をお待ちするとともに、「化学物質及び生物のリスクの評価と管理」に対する幅広い提言を期待したい。

(文責：化学生物総合管理学会 高月峰夫)